

7回目の年男を迎えて ～思い出すまゝに～

金子 弘

昨年（令和2年）は第二次世界大戦敗北から七五年が経過し何時の間にか7回目の年男を迎えた。私は2・26事件の1ヶ月前（昭和11年）にこの世に生を受け、昭和12年日華事変、同16年に大東亜戦争が勃発。戦争は激化の一途を辿り、出征兵士の見送りと、やがて英霊のお迎えなど母は多忙を極め、物資も欠乏し、食料は配給だけでは賄いきれず、品物と食料との物々交換等で飢えを凌いだ。ある裁判官は法を遵守したため餓死してしまった。私の中学生時代の弁当は新聞紙に包んだ薩摩芋であった。食料の豊富な今日でも折詰の蓋についた御飯粒を無意識に一粒残らず食べる習慣が身についている。

昭和20年8月15日非常招集がかかり、国民小学校4年生の私は油照りの校庭へ裸足で行き、玉音放送を意味も判らず聞き、女性教師のすゝり泣きと家人などの話で敗戦を知った。女性は頭を坊主頭にして顔には煤を塗っておかないと辱めを受ける等が話されていた。昭和21年新憲法発布、男女同権、婦人に参政権が与えられた。母は婦人の地位向上を目指して、「大日本国防婦人会」「愛国婦人会」を解散し「槻の友婦人会」を結成。参政権の行使に伴い、まずは政治の仕組みから勉強一般教促、食生活改善などの講習会を定期的に行っていた。

新制中学校が誕生したがまだ校舎が無いため、小学校の教室を借りての2部授業だった。苦肉の策として一町三ヶ村の組合立中学校を建設した。これは、町村合併のはしりであった。通学は鎌持参で登校し校庭の整備などを行った。

昭和23年、戦後の治安維持のため自治体警察署が設置され母は全国で紅一点の公安委員に任命されたが警察の一本化に尽力し3年余りでその自治体警察署は廃止になった。

昭和27年教育法が改正され教育委員会制度が発足し現在のように任命制ではなく選挙に母はかつぎ出され2期務めた。そのような忙しい中にも趣味の長唄は続けた。私は物心ついた頃より三味線の音色を聞き、母の長唄の友人に日本舞踊の手解きを受け、花柳舞鶴師匠が平成30年1月19日に急逝するまでお稽古を続けていた。3月25日の日本橋公会堂のおさらい会が予定されていたからだった。

平成3年6月イイノホールでの「雨の五郎」平成8年3月17日（日）三宅坂国立劇場「山姥」の女役等出演のご指導を受けた。

花柳舞鶴（ぶかく）先生と最後の言葉を交わしたのは1月17日（水）の「助六」のお浚いが終わり玄関で「今度は金曜日ですね」「はい明後日伺います」「それではお待ちしております」とおっしゃられたのが最後のお別れとなった。

昭和 26 年 4 月埼玉県立春日部高等学校へ新しく新設された中学校より入学した。当時の最高学年は旧制中学生であった。

私の出身地は人形の町岩槻（現さいたま市岩槻区）である。幼い時より聞き慣れた言い伝えに「岩槻に過ぎたるものが二つある、児玉南桐に時の鐘」。児玉南桐は江戸後期の岩槻藩の藩校「遷喬館」を創立した漢学者。時の鐘は現在でも朝夕 6 時に時を告げている（遷喬館は県内唯一現存する藩校）。

岩槻は室町時代に大田道灌公がこの地に城を築いたのにはじまる。道灌公は築城にあたり最適値として風光明媚な小高い丘を見つけたが、そこは沼地であった。さてどうしたものかと思案にくれているその時、一羽の白鷺が嘴に銜えていた小枝を沼地に落として羽を休めている様を見て、そこに岩槻城を築いた。別名白鷺城、竹束の城（基礎に竹を井桁に組んで沈めた）ともいわれている。

風雲急を告げる幕末、岩上進著『幕末武州の青年群像』によると、ペリー提督率いる黒船が浦賀にやって来る七年前、既に江戸湾防備の体制整備は、浦賀奉行以外に武州の三藩即ち川越藩は三浦半島、忍藩（行田市）は房総半島、岩槻藩は外房の勝浦から和田村にかけて、16.7 里（約 65 キロ）ほどの海岸沿いに領地を有していたので沿岸警備に任じていた。この領地は現在の千倉町で旧岩槻市時代から姉妹都市となっている。安永 9 年(1780)清国船が漂着した時は郡（こおり）奉行であった児玉南桐の活躍によって、適切な処理をしたことで知られている。また最近ではこの千倉町は、村上春樹の話題作「1Q84」BOOK3 の中で登場人物の父親が入所していた海辺の療養所が記述されている所である。

黒船一番のりは、弘化 2 年(1845)2 月、アメリカの捕鯨船メルカトル号が房総沖から洲之崎に向かう途中発見され、直ちに川越藩大津陣屋に報告が入り、動員体制がとられ、メルカトル号を浦賀に誘導した。メルカトル号は、日本人の漂流民 20 人の返還と薪・水の補給を求めた。日本側はこれを許したので、間もなく退去し、事なきを得た。それでもこの時には、川越藩だけでも大津陣屋から 420 人、三崎陣屋から 151 人が出動し、近村の船 119 隻が集結された。

次いで翌三年(1846)閏 5 月、アメリカの軍艦 2 隻が伊豆大島の沖合を航行しているのを漁船が発見し、注進に及んだ。報を受けた大津陣屋からは直ちに早馬、早飛脚が江戸へ飛んだ。そして早速、たくさんの船を出して城ヶ島沖と野比沖でこの 2 艦を差し止めることが出来た。この 2 艦はアメリカの東インド艦隊司令長官ビッドルの率いるコロンバス号とヴィンセンス号で、来航の目的は、日本が通商を開始する意思があるかどうかと打診するためであった。

岩槻は日光東照宮が造営された江戸時代から宿場町としても栄えた。この岩槻周辺は昔から桐を産し、箆笥や下駄の産地として知られていた。その良質の桐を鋸で挽いた大鋸屑（おがくづ）を練り固めて人形が作られ、また、この地域の水は人形づくりに欠かせない胡粉（人形に塗る白い粉）を解くのに最適であった。日光東照宮造営に来ていた

工匠がそれらを知り帰路岩槻にとどまって人形づくりをはじめたといわれている。

昭和 26 年前述の春高入学当時に戻ると、我々の新制中学校は体育の指定校として県の教育委員会より何度か指導を受けていたので同期 3 名で体操部に入部したが、明治 32 年創立で体育館はなく雨天体操場と称するもので、剣道部と柔道部が使用していた。体操部は梁から吊り下げた吊環だけであった。マットはなく古畳であった。鉄棒は校庭の片隅の砂場付きの固定式。平行棒は大工さん特製の台を地面に埋め込み、樫で作られたバーを大工さん特製のその台に嵌め込んだ。冬は地面の霜が日光でとけるので掘り返して他の場所に移動した。

埼玉県立春日部高等学校は、昭和 28 年春季休暇の前日(3 月 25 日) 出火し、本館はほぼ全焼してしまった。焼け残ったのは書道室、講堂、雨天体操場と寄宿舎のみであった。午前四時頃、母に起こされ約十軒の道程を自転車で駆け付けた。当時体操部新 3 年生の主将として春合宿に備えて粕壁小学校よりマットを借りていたのと、雨天体操場の吊環が心配だったからである。燃え盛る炎を横目に普段登らないところに登り吊環をはずし、マットと共に運び出した。焼跡が片付くまでは、岩槻城趾公園の松の横枝に吊環を下げて練習、徒手体操は土の上で行った。新学期には講堂横の等間隔に植えられていたポプラの枝分かれに焼け焦げた松の梁を渡しての練習であった。鉄棒や平行棒も勿論屋外に設置して練習した。県内の体育大会では我々だけが日焼けしていた。

昭和 28 年 4 月の新学期は焼け残った雨天体操場・講堂を仕切って教室とし、1、2 年生が使用し、3 年生は寄宿舎(二階建)をそのまま教室とした(土足)。校舎建設寄付金は毎月 250 円を授業料に加え計 1000 円を在校生も負担し 1 年生は 3 ケ年支払っても新校舎は使用出来なかった。なお我々の卒業式は春風と共に砂埃が舞う屋外で挙行了した。

恒例の三年生の修学旅行は校舎全焼につき中止の方向であったが、保護者会で検討され当時は新幹線もなく一生に一度関西方面に行く機会だからと 2 ヶ月遅れで京都・奈良方面に夜行列車で行ったが比叡山延暦寺の帰路ケーブルカーが鉄橋上で脱線し枕木の間から谷底を見ながら下山した。旅行参加者 145 名中負傷者 14 名であった(留守宅では大騒動だったとのこと)。

昭和 28 年第 8 回国民体育大会が愛媛県松山市にて昭和天皇皇后御臨席のもと開催された。当時は新幹線も四国架橋もなく夜行列車で宇野(岡山県)まで行き宇高連絡船で高松(香川県)へ渡り更に列車で愛媛県松山市へと向かった。東京駅を午後四時頃の夜行列車に乗車し現地に到着したのは翌日の午後 7 時過ぎであった。

この宇高連絡船は翌年台風で遭難し修学旅行生等多くの尊い命が失われた(紫雲丸事故) 大会成績は予選 20 位までに、入れば閉会式までいられるから頑張れと励まされ結果は 12 位であった。平行棒の演技終了直後傍で見ていた人に呼び止められた。夏合宿に指導に来ていた東京教育大学(現筑波大学)体操部主将の堀米さんであった。後日入学試験の指導や下宿等面倒を見るからと体操部の入部を強く勧誘されたが日本歯科医専出身の伯父が曾て、アントワープのオリンピックに陸上選手として「400 メートル」

と「800メートル」に出場した持ち主だったがそこまでの実力を伴わない事を自覚していたので歯科医師のみに専念することを告げお断わりした。

この原稿を書きはじめた頃、歯科界のビッグニュースが飛び込んで来た。東京歯科大学と慶応義塾大学の合併問題が11月26日に2023年4月をめどに協議とのニュースであった。私は昭和48年9月21日(1983年)に慶応義塾大学大学院に論文を提出して学位を請求し医学研究科委員会の論文審査に合格し医学博士の学位記を久野洋慶応義塾大学長より、福沢諭吉先生を記念して建設された三田の演説館において学位記(第712号)を授與された。当時歯科医師が学位を取得するには学位論文の審査権のある大学に論文を提出し審査を受けなければならなかった。戦後GHQの指導で大学に昇格したが、私が進学過程に進級した当時大学院の建設が始まり工事の騒音の中授業を受けた。大学院が正式に機能するまでは、専攻科制度ができ研究室に入室して、教授の指導を受けた。私の場合は病理学教室が一般病理と口腔病理に分かれて一般病理に歯科医師が慶応大学医学部を卒業した言わばダブルライセンスの教授で脳出血の研究を行っていた山村武夫教授のもとで、高血圧性脳出血の発生機転に関する研究「前障一外包部出血について」の研究に勤しんだ。

人生百年時代と言われて久しいですが私より若い人が脳出血の後遺症のリハビリを余儀なくされている人を多く見かけます。

弊医療法人歯健長壽会金子歯科診療所では15年前より在宅診療(居宅・施設を問わず)に尽力して参り現在に至っております。平成31年(2019)管理型歯科医師臨床研修施設として発足しプライマリーケアの五原則(近接性、包括性、協調性、継続性、責任性)に則って地域密着型診療所を堅持しご支援いただいた人達に感謝しつつ診療を継続して行えればと思っております。

人生のアディショナルタイムを慎重に歩みたいと思いつゝ憫筆致します。

令和2年12月19日

参考文献

近代歯科医学教育を拓く 東京歯科大学創立 120 年記念誌

岩上進著『幕末武州の青年群像』

厚生省収健第 258 号

厚生労働省発医政第 0401001 号

慶応医学 第 50 巻 第 3 号 (昭和 48 年 5 月)

別冊 高血圧性脳出血発生機転に関する研究 前障一外包部出血について

医療法人 歯健長壽会 金子歯科診療所

著者への連絡先

住所 〒338-0001 埼玉県さいたま市中央区上落合 7-6-2

E-mail info@shiken-tyoju.com

別冊ご希望の方はお申し出下さい (無料)